

苦によって気づいた 「いのちへの感謝」

長野中央教会 高木加奈子さん

高木さんの二女は中学3年生の時から不登校になった。理由も分からず腫れ物にさわるといふような日々を過ごしている頃、ある人からのアドバイスで、ありのままを受け入れようと決意した。それからは、二女のがんばりをほめ、「お母さんはいちばんの応援団だよ」と励まし続けた。社会人となった二女は念願だったブライダルメークの仕事に就いた。その年の10月、教会の25周年式典に向け準備の最中、一人暮らしの母が脳出血で突然他界してしまう。「なぜ、心待ちにしていた式典の前日に、一人寂しく…」と、その死を受け入れられずにいたが、「人生の最期はだれにもわからない。だからこそ、いただきたいのちに感謝して生きる大切さを母が教えてくれた」と思えるようになった。高木さんは、二女の不登校や母の死という苦があったからこそ、それに気づくことができたと感じ、心のなかで手を合わせた。



なぜ、苦しみが続かないのか

大きな苦しみをかかえたり、苦労を重ねたりすることを「四苦八苦する」などといいます。この「四苦八苦」が仏教の言葉であることはよく知られています。

釈尊はしかし、この「苦」を、いま私たちが一般的に使う「苦しく、つらいこと」という意味で示されたわけではなく、つらいことです。「苦」の語源は「思いどおりにならないこと」を意味する「ドウツカ」という言葉ですから、「自分にはどうすることもできないこと」を示しています。ところが、それを「なんとかしたい」と望み、そのことにとらわれて諦めきれないと、心に「いやだ」とか「つらい」といった感情が起こってきます。そのとき「苦」は、身心を苛む「苦しみに」変わります。

そうならないために大事なことは、直面した「苦」を「苦しみ」へと増長させるのではなくて、「苦」との出会いに「智慧」に目ざめるチャンスでもあると気づくことです。苦しみや悲しみ、怒りやつらさにもつながる「苦」も、そこに感情をまじえなければ「無記」、つまり善でも悪でもないのですから、それをどのように受けとめ、制御するかで、その後の人生に大きな違いが生まれてきます。